Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

世尊寺本字鏡の片仮名字体

著者	樋口 悟史
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 9: 1-7(1997)
発行年月日	1997-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022418

(C) 1997 the Author.

世尊寺本字鏡の片仮名字体

樋口悟史

一

『世尊寺本字鏡』については、これまでにその成立年代に関してあるいは他の文献資料との関係について、また『世尊寺本字鏡』自身の構成等について貞苅伊徳氏、前田富祺氏、築島裕氏（注1）をはじめ様々な先行研究がなされてきた。その結果『世尊寺本字鏡』が『一切経音義』『新撰字鏡』、図書寮本系、および観智院本系の『類聚名義抄』等の文献から強い影響を受けていることなどが明らかにされ、その成立年代に関してはこれらの文献との関係から、院政期から鎌倉時代の間の時期に成立したものであるとされてきた。築島氏は、『古辞書音義集成六巻・字鏡』の解題の中で『世尊寺本字鏡』に観智院本系の『類聚名義抄』からの引用があるとするならばその成立は十二世紀以降であろうと述べられている。さらに『世尊寺本字鏡』の紙質や装幀、筆蹟等が鎌倉時代中期のものであり、用いられている片仮名の字体も鎌倉時代中期の十三世紀中葉の字体であることを仮名字体表を作って示された。しかし『世尊寺本字鏡』で用いられている片仮名の字体について詳しく調べてみると築島氏が述べられた字体のほかにも用いられている異体字があり、また異体字の分布の仕方や傾向については述べられてはいない。そこで本稿ではまず『世尊寺本字鏡』内で用いられている字体を片仮名に限って残らず調査し、それらの字体が『世尊寺本字鏡』内でどの様に用いられているのか、異体字の用いられ方になんらかの規則性はあるのか、また『世尊寺本字鏡』で用いられている字体は片仮名の国語史上の中でどの時代の字体と類似性が認められるのかといった点を考察していきたい。

二

まず『世尊寺本字鏡』の仮名字体表を作成する。

「世尊寺本字鏡」仮名字体表

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
レ	ロ 糸	ラ	ヤ	マ ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	サ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
丶	井	リ		ミ	ヒ	ニ 尓	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス 爪	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ	ヘ	子 尓	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ ヲ	ノ	ト	ソ	コ	オ

その結果、築島氏が述べられた字体の他に「爪・尓(二)・(木尓・ホヲ・了・糸」の七つ異体字が新たに見つかった。さらにこの仮名字体表から「世尊寺本字鏡」で用いられている片仮名は字体や異体字の種類などから平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての字体と同様のものであると判断できる。参考として「世尊寺本字鏡」の成立に影響を与えたと考えられる図書寮本「類聚名義抄」に用いられている片仮名字体を表にまとめてみると次のようになる。

図書寮本「類聚名義抄」仮名字体表

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	糸 ロ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	サ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ ツ	爪	ク	ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	工	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ	ロ	ヨ ヨ	モ モ	ホ ヲ 小	ノ	ト	ソ	コ	オ

院政期頃に字体が統一に向かい概ね完成した感のある片仮名の変遷について、小林芳規氏はさらに、鎌倉時代以降わずかながら主に運筆によると思われる変化を指摘されたが(注2)、「世尊寺本字鏡」に用いられている「ツ」「ウ」「ケ」「ミ」の字体にもそのような例がみられる。以下に詳しく見てみる。

「ツ」の字体は院政期では「三」と三画とも縦に平行に並んで書かれていてものが鎌倉時代に入ると「ツ」と終画が斜めに傾く傾向がみられるようになるが、「世尊寺本字鏡」に用いられている「ツ」の字体には鎌倉時代の特徴を

もったものも用いられている（表1）。

「ウ」の字体は院政期には字母の「ウ冠」に忠実な形で「ウ」の形が用いられていたものが鎌倉時代に入ると終画が伸び「ウ」の形になっていく傾向がうかがえるが『世尊寺本字鏡』では明らかに鎌倉時代の特徴をもった字体が用いられている（表1）。

「ケ」の字体は院政期から鎌倉時代にかけて「ケ」→「ケ」の様に二画目の横線が真直ぐに伸びる変化があらわれるが『世尊寺本字鏡』では「ケ」の様に二画目の真直ぐな字体が用いられている（表1）。

「ミ」の字体は院政期以前では字母の「三」に忠実な形として三画とも横に平行に並んでいたものが徐々に「ミ」と傾きをもつようになってくる。『世尊寺本字鏡』のなかの「ミ」は、「ミ」の様に院政期ごろの傾向をもったものが中心的に用いられており数のうえではわずかであるが「ミ」と傾きをもったものが用いられている（表1）。

このように『世尊寺本字鏡』では平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての字体が用いられており、かつ院政期と鎌倉時代とでは字体に相違がみられるものでは明らかに鎌倉時代の字体の特徴をもった字体が用いられているものがある事がわかる。

表1『世尊寺本字鏡』内の鎌倉時代の特徴を持った字体例

ツ	ウ	ケ	ミ
7・3・2	99・2・2	51・5・1	380・4・3
52・3・4	248・1・3	53・4・3	
76・2・3	249・6・1	153・3・2	

（この表は例えば『世尊寺本字鏡』（汲古書院、一九八八年）の七ページ三行二段目にある和訓ということを、上から7・3・2として示した。以下同様。）

三

次に『世尊寺本字鏡』内の異体字の用いられ方について考察を加えたい。『世尊寺本字鏡』では「ス・キ・ニ・ネ・ホ・マ・ワ」の音で一つの音に対して二つ以上の異体字が用いられておりそれぞれの異体字の使用率は次のとおりである。

「ス・キ・ニ・ネ・ホ・マ・ワ」の異体字の使用率

乆	ス
3回	230回
1.3%	98.7%

「ス」の字体の使用率

キ	丶
45回	1045回
4%	96%

「キ」の字体の使用率

尓	二
1回	360回
0・3%	99・7%

「ニ」の字体の使用率

尓	子
5回	298回
1.6%	98・4%

「ネ」の字体の使用率

丁	丶
156回	868回
15%	85%

「マ」の字体の使用率

禾	口
11回	307回
3%	97%

「ワ」の字体の使用率

平	小	口
1回	10回	603回
0.2%	1.4%	98.4%

「ホ」の字体の使用率

いずれの音も一つの字体が中心的に用いられ、他の字体は割合的には一割以下となっており（「丁」の字体に関しては一割五分）実質的には一つの字体が用いられていると考えることができ、「字体の統一化」という院政期ごろの傾向を示していると考えられる。

そしてこの一割にも満たない使用頻度は非常に小さい割合であることから、『世尊寺本字鏡』の著者が普段用いない字体をなんらかの理由で用いた、あるいは引用文献の記述をそのまま採用した結果ではないかと思われる。それは、いずれの字体も平安時代後期から院政・鎌倉時代初期頃にかけて用いられた字体であり、『世尊寺本字鏡』の成立がこの時期に当てはまるとするならばそれぞれの字体の用いられ方がある程度近い数字になると考えられるからである。しかし、なぜ一方の字体の使用率が非常に低いのかを示す傾向は今回の調査では見いだせなかった。

『世尊寺本字鏡』内では前述の通り「ニ」の字体が中心的に用いられているが、表2の通り「丁」の字体は、二冊に多く偏って用いられている。また「丁」の字体はその使用率に篇ごとに大きな偏りはみられないが、第四十四篇「弋」で「ニ」の字体が〇回、「丁」の字体が二回用いられており、同様に第七十篇「雑」部で「ニ」が十七回、「丁」が二十七回とその使用頻度が逆転していた。このような例は「弋」と「雑」部の二篇のみであり『世尊寺本字鏡』の内部構成にその原因があるのではないかと思われる。例えば、「雑」部についてはおそらくある程度の時間的な隔たりの後に増補されたものであり、第一冊と第二冊ではその成立時期に多少のずれがあった。そして、第二冊に「丁」の字体が多く用いられている点に関しては『世尊寺本字鏡』の内部でその成立過程において時間的な相違があったことを示しているのではないかと考えられるのである。

表2「マ」の分布

	マ	ア
第一冊	414回 93．6％	28回 6．4％
第二冊	454回 78％	128回 22％
計	868回	156回

次に「ホ」「ス」「ワ」「ニ」「ネ」の異体字について考察する。表3は「ホ・ス・ワ・ニ・ネ」の音の異体字で各々使用頻度の低い字体の第一冊と第二冊での用いられ方をまとめたものである。これらの異体字はいずれも使用回数が非常に少ないために、「マ」の場合とは異なった原因で用いられたものと考えられる。つまり用いられ方の少なさと第一冊、第二冊での偏りのなさから、著者がなんらかの理由で原典等に忠実に従って書き写した結果であるか、あるいはこれらの字義、和訓が後の増補であることを示していると思われる。

表3　「ホ」「ス」「ワ」「ニ」「ネ」の分布

	第一冊	第二冊
ホ	3例	7例
平	0	1例
凡	0	3例
禾	6例	5例
尔(ニ)	1例	0
尔(ネ)	2例	3例

四

「世尊寺本字鏡」では踊り字が次のようなかたちで用いられている。

（一）一文字の繰り返しでは「〻」の形が用いられている。

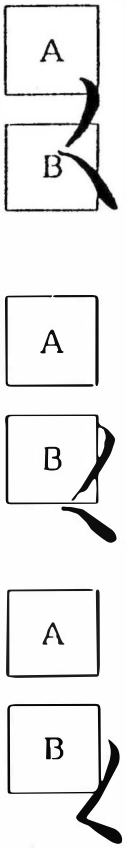
（二）二文字以上の繰り返しには「〻」「〳〵」の形が用いられている。

（三）二文字以上の繰り返しについては（二）以外にも、踊り字を用いずに繰り返し表記されたものがある（カハルカハル）。

このうち（二）の形の踊り字が時代的な特徴をもつものであるため、以下詳しく考察していきたい。「〻」の形をした踊り字は主に平安時代後期に用いられたものである事が知られているが、この形の踊り字は「世尊寺本字鏡」の

中では第一冊に十九例、第二冊に三十六例存在する。第一冊、第二冊の別による偏りはみられず部首別ごとの偏りもなく全体に平均して用いられている。

次に「く」の形をした踊り字について考察したい。「く」の形をした踊り字は「く」の線の起筆位置に時代的な特徴をみることができる。「く」の形は主に院政期に入ってから用いられるようになり、それまで用いられてきた「〻」の形が運筆上の流れから一つにつながってできたものとされている。「く」の形の踊り字の起筆位置については小林芳規氏が院政期、鎌倉初期、鎌倉後期とそれ以降の時代のそれぞれの特徴をあげられた（注3）。それによると、院政期には起筆位置は図のように上字の右端、鎌倉前期には下字の右端で真中より上寄り又は右肩にかけて、鎌倉後期にはいると下字の右端で真中あるいは下寄りから起筆するという傾向を指摘された。



（院政期）　（鎌倉前期）　（鎌倉後期）

「世尊寺本字鏡」内の「く」の形をした踊り字は全部で十九例存在する。

（212・4・4）（218・1・1）（238・6・3）
（289・6・2）（346・2・2）（350・6・2）
（374・6・1）（380・4・3）

以上、院政期の形の例　第一冊該当例なし・第二冊八例

（53・6・4）（109・4・1）（161・1・2）

以上、鎌倉前期の形の例　第一冊三例

（242・3・1）（249・2・4）（311・6・2）
（312・1・1）（349・6・2）（375・6・1）
（382・6・4）

以上、鎌倉前期の形の例　第二冊七例

（237・2・1）

以上鎌倉後期の形の例　第一冊該当例なし　第二冊一例

	院政期	鎌倉前期	鎌倉後期
第一冊	0例	3例	0例
第二冊	8例	7例	1例

この表から「く」の形の踊り字は第二冊に偏って多く用いられていることがわかり、時代的には院政期から鎌倉前期にみられる特徴を持ったものが用いられていることがわかる。そして第二冊に時代的に新しい形の踊り字が偏って用いられている点は『世尊寺本字鏡』の成立過程になんら

かの原因があるものと思われる。

五

以上のように『世尊寺本字鏡』で用いられている仮名字体と踊り字については主に平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての特徴をもったものが用いられており、またその用いられ方については『世尊寺本字鏡』の成立過程になんらかの原因があると思われる使われ方がなされている。それは明確には断言できないが恐らく『世尊寺本字鏡』が時間的な隔たりを経て複数の人間の手によって書かれたものである事を示しているものと思われる。

注

1　貞苅伊徳「世尊寺本字鏡について」『国語学』二十三　一九五五年
　前田富祺「世尊寺本字鏡の成立―新撰字鏡と類聚名義抄との比較において―」『本邦辞書史論叢』三省堂　一九六八年
　築島　裕「字鏡（世尊寺本）解題」（『古辞書音義集成六巻』所収）汲古書院　一九八八年
2　小林芳規「踊り字の沿革續貉」『広島大学文学部紀要』二十七　一九六七年
3　小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』特輯号三　一九七一年

なお、テキストは、『世尊寺本字鏡』（古辞書音義集成第六巻、汲古書院、一九八八年）、『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社、一九七六年）を使用した。

（埼玉県職員　一九九六年信州大学卒業）